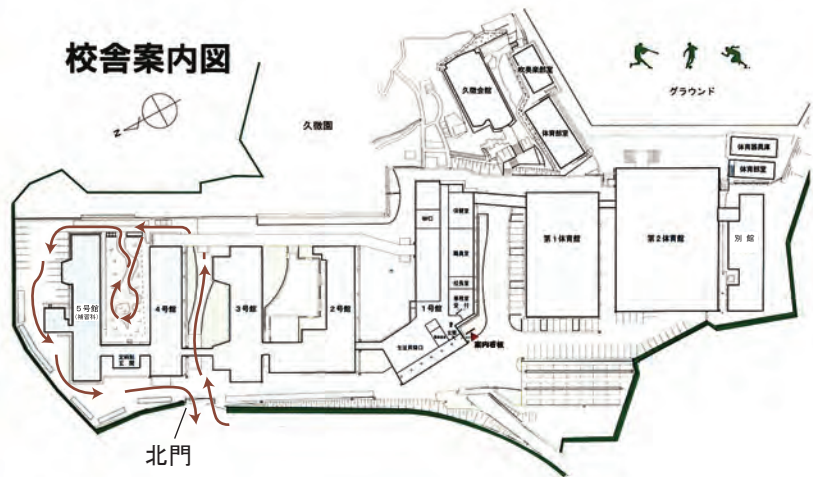


校舎間Bコース

3～4号館間中庭、4～5号館間久徴和風庭園

5号館への通学道路を登ると北門に至ります。北門を入ると眼前に大きな樹があります。クスノキです。胸高周囲3.3m、樹冠直径約10mの大木で樹齢は分かりませんが、おそらく女子師範学校当時の生き証人(樹)だと考えられます。クスノキの幹からスダシイが生えています。



校舎間Bコース案内ルート図

1. クスノキ(クスノキ科、5～6月、10～11月)

クスノキは、「楠」と書いたり、「樟」と書いたりします。葉を1枚とって切って嗅いで

みると、樟脳の臭いがします。クスノキは材も樟脳を含み、腐りにくく虫がつきにくいので、タンスや水車、丸木船などに使われました。強心剤のカンフルは樟脳を精製してつくったものです。古くから神社などに植えられ、全国に天然記念物に指定された大木、巨木があります。日本最大は鹿児島県蒲生市の「蒲生の



クスノキ



クスノキの葉裏

大クス」で幹周りが24.2mもあり、特別天然記念物に指定されています。最近では、公園や街路樹としてよく植えられています。出雲市内医大通りの街路樹はクスノキです。出雲市立出雲中央図書館の前には9号線に沿って5本のクスノキが植えられています。昔は、

クスノキのことをナンジャモンジャノキと呼んだ時もありました。

光沢のある葉には、3本の葉脈があり、その分枝点に小さな膨らみがあり、樟脳成分がないと生きられないフシダニというダニが生息しています。

5～6月頃、枝先に黄緑色の目立たない花がまばらに付き、10月～11月にかけて黒い実を沢山つけます。

クスノキを見上げながら3～4号館の渡り廊下を潜って中庭に入りましょう。

向かって右、3号館裏、奥に室外機のある小庭園の中の植物を見ていきます。ここには、前側にヤブツバキ、コバノミツバツツジ、シモクレン、トウジユロ、イヌツゲが、中側にはトサミズキ、グッケイジュ、ユズリハ、後方にヤマモモ、クロガネモチ、コウバイがあります。

2. ヤブツバキ(ツバキ科、2～4月、9～11月)

ヤブツバキは照葉樹林下の小低木で、たくさん栽培品種をつくりだしました。園芸種をツバキ、自生のものをヤブツバキもしくはヤマツバキといいます。葉が厚いことから「厚葉木」それがツバキとなったとが、葉に艶があることから「艶葉木」とかいう説があります。「椿」は春に花が咲く木ということで日本で作った和字です。

日本海側の多雪地帯にはユキツバキという地面を這う様な樹形のツバキがあります。小林幸子歌う「雪椿」でも有名ですネ。葉柄に毛がある、花が小さい、花弁が開き気味になる等の点でヤブツバキと区別されます。サザンカやフビスケツバキとの比較はP.27を見て下さい。

万葉集でもヤブツバキは「つばき(椿)」です。

河の上のつらつら椿つらつらに見れど飽かず巨瀬の春野は かすがのおゆ (春日老)

3. コバノミツバツツジ(ツツジ科、4～5月、9～11月)

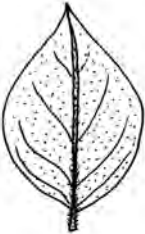


春4月、山に葉の開く前に紅紫色のツツジが点々と咲きます。花が終わる頃3枚の葉が偽輪生して開きます。この姿から「三葉躑躅」の名がつけました。ミツバツツジの仲間は全国にたくさんあって区別が難しい植物のグループです。県内にあるミツバツツジとしては、ダイセンミツバツツジ、ユキグニミツバツツジとこのコバノミツバツツジでしょう。

コバノミツバツツジは「小葉の三葉躑躅」ですが、他のミツバツツジより葉が小形であることによります。しかし、葉の大きさには個体差がありますので一概に決められません。そこで、決め手は葉の裏の毛の状態によります。葉の裏を見ますと、コバノミツバツツジは軟毛という毛が一面にあるのと葉柄から主脈に伏毛があります。ダイセンミツバツツジは葉柄から主脈にかけて長軟毛がやたらとたくさんあるがその他は無毛なので、ユキグニミツバツツジは葉柄に



コバノミツバツツジ

は毛がないので区別します。まず、ここにあるコバノミツバツツジで調べてみて下さい。ダイセンミツバツツジは久徴園の元茶室の横にあります。いずれにしてもよほど見慣れないと見分けがつかません。この3種のミツバツツジを表にして分類してみましたので参考にしてみてください。5号館の東斜面へ移植しました。

和名	コバノミツバツツジ	ダイセンミツバツツジ	ユキグニミツバツツジ	
分布	隠岐、島根半島を除く	県内全域	島根半島、隠岐	
葉	表	粗毛あり	無毛	
	裏面	有毛ザラつく 中肋に褐色伏毛	無毛 中肋に長軟毛密生	若葉に白毛 中肋基部に長軟毛
	葉柄	伏毛密生	長軟毛密生	無毛
	大きさ	3～5 cm、小形	4～7 cm、大形	5～8 cm、大形
花	最も早い、頂に1～3個	少し遅い、頂に1個	最も遅い、頂に1個	
図 (葉の裏面)				

4. シモクレン(モクレン科、4～5月)

P. 86を参照してください。

5. トウジュロ(ヤシ科、5～6月、9～11月)

中国南部原産の植栽されているシュロ。中国風なので唐ジュロ。シュロに良く似ていますが、葉の質が堅く、短いので葉先が垂れ下がりません。この樹に花が咲くかどうかは分かりませんが、花が咲けば黄色の花の房が先端から垂れ下がります。白い粉をふいたような青黒い実がなります。幹を黒い繊維質のシュロ皮が取り巻いていて、これを縄や敷物、ホウキにしたり、葉は蠅取りや団扇にしました。

6. イヌツゲ(モチノキ科、6～7月、10～11月)

トウジュロの左側にあります。あまり大きくはならない木のようなイメージがありますが、山地では15m位にはなるといいます。庭で低く丸く刈り込むのはタマツゲですが、イヌツゲはかなり大きくなり、庭木としていろいろな形に刈り込んで楽しめます。ツゲの葉は丸く、果実は楕円形、イヌツゲの葉は楕円形で、果実は球形です。

7. トサミズキ(マンサク科、3～4月、9～10月)

中段にあるのがトサミズキです。株立ち気味になります。ミズキとは水の出てくる木ということで樹液が多く、特に春先に枝を折ると水を吹



トサミズキ

き出しますが、これはマンサク科であるからどうでしょうか。しかし、ここの木では実験をしないでください。春、葉の出る前に黄色い花を下垂する様に咲かせます。

土佐みずき^{さんしゅゆ}山菜莢も咲きて黄をきそう（秋桜子）

8. ゲッケイジュ(クスノキ科、4～5月、10月)

右奥にあります。気候温暖で夏の雨量の少ない地中海性気候に発達する硬葉樹林を代表する樹木です。古代オリンピックでは都市国家の名誉をかけて、唯一この木で作った月桂冠を頭にいただくことのみを目標にスポーツ競技に命をかけました。今日でも、大きなマラソン大会の優勝者には月桂冠をかぶせます。葉にも果実にも芳香があり、葉を干したものをベイ・リーフとかローリエといって肉料理やカレーライスなどの香辛料として用いられます。これまた雌雄異株ですが日本には雌株は少ししかありません。もし雌株があれば10月頃、1cm位の暗紫色楕円形の果実がなるはずです。P.92を参照。



ゲッケイジュの雄花

9. ユズリハ(トウダイグサ科、5～6月、10～11月)

後ろの真ん中にあります。まだ小さな木です。葉のつけ根つまり葉柄が赤くなる傾向があります。新しい葉が出てから古い葉が落ちることから「譲り葉」といって、親から成長した我が子にあとを譲ることに例えてめでたい木とされ、正月の飾りに使われます。日本海側の多雪地帯にはエゾユズリハがあって、県内の山地のユズリハは大体これに相当します。久徴園にはあちこちに生えています。

しづかなる冬木のなかのゆずり葉のほふ厚葉に紅のかなしさ（斎藤茂吉）

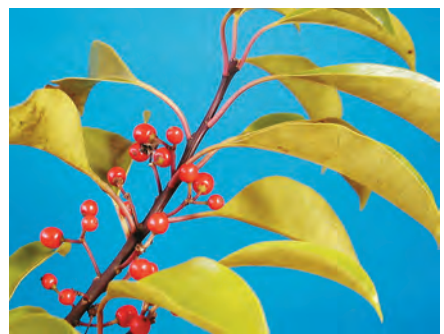
10. ヤマモモ(ヤマモモ科、3～4月、6～7月)

後ろの最も大きい樹です。暖地の山地で大木になり得る木です。これまた雌雄異株で、雌株には夏に径1～2cmで赤色球形のちょっと香りの強いおいしい実がたくさんできます。この木には実がなるから雌株ですが雄株はというと正門の向こうの自転車小屋のところにまだまだ小さい木ですがちゃんとそろっており、そこから花粉を飛ばしています。旧斐川町の町の木になっていて、町内の街路樹として随所に植えられています。

やまももや今年の梅雨もをはりなる（三山）

11. クロガネモチ(モチノキ科、5～6月、11～翌4月)

暖地の山地に生える雌雄異株の常緑高木です。葉



クロガネモチ

や枝が黒味を帯びているためにこの名前がついたという説とこれらが乾くと黒くなることからついたという説があります。庭木や街路樹として植えますが、雌株にできるたくさんの赤い実は冬きれいです。

12. ウメ(バラ科、1～3月、5～6月)

元会議室の前に古木の紅梅があって、年々歳々綺麗な花をつけていましたが、今回の校舎新築によって生かすことが出来ませんでした。ウメは「烏梅」からの、中国語のムイまたはメイからの、朝鮮語のマイからなどの転訛したものとの諸説があります。ウメの学名はPrunus Mume Sieb. et Zucc.とありますが、この種小名のMumeはウメの古名ムメからつけられたものです。紅梅は勿論園芸種、改良種ですが花の赤いのもさることながら、枝も赤味を帯びており、枝の髓を折ってみると中が赤いという特徴もあります。

春さればまつ咲く宿の梅の花ひとり見つや春日暮らさむ (山上憶良)

梅一輪一りんほどのあたたかさ (嵐雪)

へつらわめ枝の強さよ梅の花 (勝海舟)

左側4号館前には、ミツデカエデ、イタヤカエデ、コデマリ、ヤブデマリ、フェイジョア、ダイダイ、ペカン(枯死)、ミツバウツギ、ナツツバキ、サザンカ(2本)の順で植わっています。

13. ミツデカエデ(カエデ科、4～5月、9～11月)

4号館側の最初の樹です。樹皮が滑らかという特徴と、「三手楓」の名前のとおり葉は3出複葉です。3枚で1枚の葉です。雄花と雌花があり、雄花にはおしべがありますが、雌花にはおしべはありません。2個の果実は羽根の開きが狭くなっています。

メグスリノキというカエデも3小葉ですが、こちらは全体に毛が多く、葉柄が短いことでミツデカエデと区別します。P. 65に記載してあります。

14. イタヤカエデ(カエデ科、4～5月、9～11月)

ミツデカエデの次の樹です。秋に黄色になるカエデの代表です。山地で紅葉に混じってイタヤカエデの黄葉は映えます。「板屋楓」とは、葉がたくさん茂って板でふいた屋根のように水が下に漏って来ないという意味です。樹液をタバコの香料に使うとか、材を家具や楽器に使うということまでは知り渡ってはいないようです。葉は浅く3～5中裂し掌状で鋸歯(葉の縁のギザギザ)がないのが特徴です。2個の翼果はほぼ直角から鋭角に開きます。



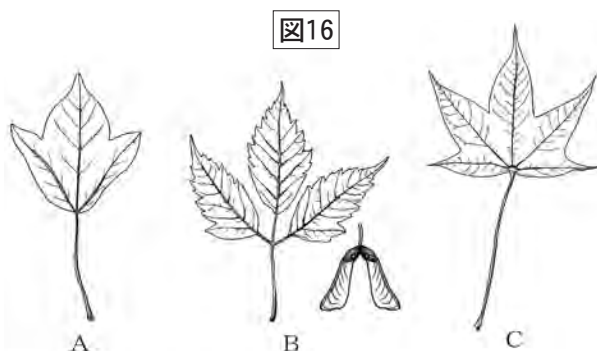
イタヤカエデ

万葉集ではもみじは「黄葉」です。

春日野に時雨ふる見ゆ明日よりは^{もみじ}黄葉^{かざ}挿頭^{なかもと}さむ高圓の山 (万葉集)

次の3種のカエデはどれがどれでしょうか。答えは、P. 121にあります。

これらの種子をそと取って向き合う2個のうち一つを頭上から離してみてください。くるくるとらせんを描きながら落ちるでしょう。風のある日などはこのようにしてひらひらと遠くへ遠くへと飛んでいきます。



15. コデマリ(バラ科、4～5月)

中国原産で庭木や生花材料とします。葉は前半分に鋸歯があり、裏が白く、花は小さな白い花が20個ばかり散房花序(側生花の上面が平坦か凸状になる花序)につき、径3cm程の球状になるので「小手毬」といいます。花序は枝に並んでつき、しばしば弓状に垂れ下がり風情有ります。

小でまりのまるくまるくと花盛り (玉置朝子)

オオデマリ(大手鞠)という樹もありますが、こちらはスイカズラ科で花の造りが全く違います。次のヤブデマリの仲間ですから比較してみてください。



コデマリ

16. ヤブデマリ(スイカズラ科、5～6月、9～10月)

山野の谷川沿いや川沿いに自生する高さ2～4mの低木です。6月頃、散形花序(主軸のほぼ一点から同じ長さの小枝が出て、周辺から中心へと咲く花序、シシウドなど)に両性花をつけ、このまわりには花冠(花弁の総称)が大きくなった装飾花をつけ、白くてよく目立ち不揃いに5深裂した独特の形をしています。ちなみにアジサイ(ユキノシタ科)では装飾花は萼の変形したものです。葉は厚く卵形で斜上する葉脈は凹んで目立ちます。夏から秋にかけてたくさん集まった果実は赤く熟して光沢があり美しくこれまたよく目立ちます。



ヤブデマリの花

ヤブデマリの仲間には、カマズミ類、ムシカリ(オオカメノキ)、オトコヨウゾメ、ゴマギ、サンゴジュなどがあります。名前と分類上の科とはよく混同しますから注意を要します。

17. フェイジョア(フトモモ科、7～8月、11～12月)

フェイジョアとは変わった名前ですが、属名のFei joaからきています。夏に直径4cm程の白い花が咲きます。白いといっても内側は紫紅色で赤いオシベがかなり多く、ちょっと派手な花です。南米原産と聞くと納得できます。秋に長さ3～4cmの長楕円形の果実が

実り、その果肉にはパイナップルとイチゴを合わせたような香りがありジャムにする人もいます。こんなところからか別名をパイナップルグワバといいます。



フェイジョアの花

18. ダイダイ(ミカン科、5～6月、 11～翌7月)

古い時代に中国から伝わったものです。暖地の庭などでよく栽培されています。果実は秋に橙黄色になりますますがそのまま木に残しておくと年を越して翌春から夏に再び緑色になります。このことから若返って次の代に伝えるという意味からダイダイ「代々」という名前となり縁起がいいとして正月の飾りに使われます。冬、ここを訪れた時、色づいたダイダイの実が一つ落ちてころがっていました。今の時代は誰も取って食べようと言う人はいないのですネ。

橙のころがるを待つ青畳 (桂 信子)

19. ペカン (クルミ科)

旧図書館の渡り廊下の北側にありました。校舎改築のためここに植え替えをした時に根付かずに枯れてしまい今は見る事が出来ません。高さ7～8mのかなり大きくなっていた樹でしたが、残念ですネ。日本でも鮮新世という数百万年前の地層からは見つかりますが、今では北米のみ原産しています。11～17小葉からなる複葉で、紅葉のきれいな木です。材をヒッコリーといい、スキー板にする程のしなやかな材です。

20. ミツバウツギ(ミツバウツギ科、5～6月、9～10月)

P. 44を参照してください。

21. ナツツバキ(ツバキ科、6～7月、10～11月)

花が夏に咲くので「夏椿」といい、別名をシャラノキ(沙羅の木)とかサラノキといいます。「平家物語」冒頭の名文句「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす・・・」の沙羅双樹として古くから寺院や庭に植えられています。しかし、残念ながら沙羅双樹はインド原産のフタバガキ科の別植物で、40mにもなる高木です。チークとならぶ有用材ですが、日本では育ちません。ナツツバキの花は6～7月頃咲き、白色で5～6cmの花弁の縁に細鋸歯(ギザギザ)があり大概一日でしほみます。でも、花のあまりないこの時期、風情のある花は茶花としてよく生けられています。



ナツツバキの花と果実

いつ咲きし既に散華の夏椿 (吉沢欣一)

図16の答：A、トウカエデ B、ミツデカエデ C、イタヤカエデ

22. サザンカ(ツバキ科、10～12月、翌8～11月)

日本に特産の樹木です。ツバキが花のまま、ぼとりと落ちるのに対してこちらは花弁がばらばらに散ります。雄しべもツバキのように筒状に合着しないではばらのままです。ツバキとサザンカの違いはヤブツバキ(P. 27)を参照して下さい。また、サザンカとツバキの葉柄をルーペで観察してみてください。産毛が生えているのはどちらでしょうか。初冬を代表する花木です。P. 27にある問題をやってみてください。



サザンカの花

冬の日のあかつき起きに貰いたる

山茶花生けて立てにけり (伊藤左千夫)

3～4号館間の東奥の渡り廊下をくぐり5号館へ移動しましょう。
そこには、和風記念庭園があります。

和風記念庭園

4～5号館の間に芝生を敷いた庭園が見られます。これは、昭和49年度の卒業記念に作られた和風記念庭園です。すでに30数年が経過し、手前のヒマラヤシーダーや4号館側のマルバアオダモ、奥のボダイジュなど木々もかなり大きくなりました。下の写真を見て下さい。手前の上から垂れ下がった葉はヒマラヤシーダーです。



それでは、この庭園を奥に向かって左の方から順に見ていきましょう。

23. カイツカイブキ (ヒノキ科、4月、9～11月)

東の端に2本大きなカイツカイブキがあって、5号館教室前にも数本並んでいます。1棟と2棟の間にもあります。校舎間Aコースの37に説明をしています。(P.96を参照して下さい。)

4号館側には、ツバキやサザンカの記念樹があって、それらの間にシモツケ、グミ、キンモクセイ、サンザシなどがあります。

24. ザクロ (ザクロ科、6月、9～10月)

小アジア原産で庭に植えられています。若枝の先が刺となることがあります。6月頃朱赤色、時に黄色、白、八重咲きの花をつけます。秋に果実が熟すと不規則に割れ、種子の外皮が淡紅色で甘酸っぱくて食べられます。

深裂けの柘榴一粒だにこぼれず (橋本多佳子)

25. クロガネモチ (モチノキ科、5～6月、11～翌4月)

日本の西南半分から東南アジアにかけて生育しています。日本では、暖地の山地に生える雌雄異株の常緑高木です。クロガネモチの名前は、葉や枝が黒味を帯びているためについたという説と、これらが乾くと黒くなることからついたという説があります。6月頃に淡い紫の花が咲きます。冬、雌株に赤い実が鈴なりになり、冬の単色の景色の中ではみごとなコントラストを示します。庭木や街路樹として植えます。



クロガネモチの果実

26. チシャノキ (ムラサキ科、6～7月、10～11月)

小鳥の巣箱の罹っている大きな木をチシャノキといいます。別名をカキノキダマシというように、カキの葉や幹によく似ていてカキノキにだまされるというのですが、実際はムラサキ科の植物で円錐花序(ナンテン、ネズミモチ、次のノリウツギのように、円錐形の輪郭をなす花序、右写真)に咲く花の構造がまるっきり違ってあり、果実もカキよりずっと小さく4～5mmです。中国地方、四国、九州から亜熱帯地方にかけて生えていますが、本校の敷地内にはかなりの数のものが生えています。また、エゴノキのことをチシャノキともいいますが、これは全然別の植物です。



チシャノキの花

27. ノリウツギ(ユキノシタ科、7～8月)

幹の内皮から製紙用の糊をつくることから「糊空木」の名前がつき、別名も「ノリノキ」といいます。トコロアオイの糊より上質とされ、全国でコシ、ネリ、ノリギ、ノリノキ、トコロ、トコロギ、キコシ、キノリなどと呼ばれています。日当たりのよい山地に普通に生えるアジサイの仲間です。夏に枝先の周囲に少数の装飾花と中心に多数の両性花をつけます。花が円錐花序(円錐形の輪郭をなす花序、右図、ナンテン、ネズミモチ、イネ科など)になる点が他のアジサイ類と異なる点です。ノリウツギの変種に装飾花ばかりになったものがありますがこれはミナズキといいます。



28. マルバアオダモ(モクセイ科、4～5月、9～10月)

トサトネリコともいいトネリコ属の落葉樹です。山地に生え、葉は奇数羽状複葉といって1枚の葉に小葉が5～7と奇数枚ついています。4月頃、白い花弁が目立つ房状の花がびっしりとつき、10月頃、長さ2～3cmの翼果を多数下垂させます。材は硬いので、同じ仲間のアオダモやトネリコと共にバットやテニスラケットに使われたり、建築材や炭材とします。



マルバアオダモの花

29. タニウツギ(スイカズラ科、5～7月)

主として日本海側の山野に普通に生えています。梅雨の頃、山の道端にピンクのラッパ状の花が枝先にたわわに咲いている光景を見ることが出来ます。これをタニウツギ「谷空木」といいます。別名をベニウツギというくらい鮮やかな花の色です。北陸地方では、カジバナ「火事花」といって縁起を担いで庭には植えない習慣があるといいます。この仲間の中には真っ白い花のものもあり、こちらはシロバナタニウツギもしくはシロバナウツギといいます。また、宮崎以西の太平洋側に生えるニシキウツギ(P. 110を参照して下さい。)というのがあります。これは花が淡黄白色から紅色に変わるので「二色空木」です。庭にはニシキウツギやハコネウツギが多く植えられているように思います。



タニウツギの花

30. トウカエデ(カエデ科、4～5月、9～11月)

トウカエデは「唐楓」で、18世紀に中国から長崎に入ってきました。高さ15mくらいになります。紅葉がきれいなことと、樹勢が強いことから街路樹として植えられることも多くあります。樹皮は暗灰色で薄汚く剥がれ、剪定するとコブ状になり特異な姿になります。葉が浅く3裂し内側に湾曲します。出雲商工会館から北へ向かう道路の街路樹として植えられていましたが、道路改修に伴い、クスノキに変わりました。



トウカエデの果実

マルバアオダモとトウカエデの下にサンザシがあり、8～9月頃、実をつけます。

31. アメリカキササゲ(ノウゼンカズラ科、6～7月、10～11月)

北米原産のキササゲで、キササゲ豆のような実のなる木という意味です。白い花の内側に紫の斑点があり、花弁の裂片の縁がちぢれています。10月頃、20～30cmにもなる細長い果実が一カ所から10本前後垂れ下がりますが、この木には近年なぜか実がなりません。

この仲間に中国原産のキササゲがあり栽培されています。葉の先が普通浅く3裂し、淡黄色の釣鐘形の花をつけ、アメリカキササゲと同じような果実を下垂します。この果実が昔から利尿剤として利用されてきました。同じ中国原産のトウキササゲは花が白色で大きく、北米原産のオオアメリカキササゲ(ハナキササゲ)は樹全体が大形で、花も果実もさらに大きく、数は少ない特徴を持っています。キササゲ類の実を見つけたら比べてみてください。

キササゲ じつ ささげ
木豆の実は豆に似何かに似 (虚子)

32. ボダイジュ(シナノキ科、6～7月、9～11月)

庭園の一番奥の中央にボダイジュの木があります。6月に写真のような目立たないが香りの良い花が垂れ下がるように咲いて、7月には、独特の形をした種子がぶら下がります。石の上にながってよく見て下さい。何かと話題の多い菩提樹ですが、詳しくは、ボダイジュの項P.87を参照して下さい。



ボダイジュの花

33. ハナゾノツクバネウツギ(スイカズラ科、5～10月)

ウツギの名前のつくもの内、ウツギ、バイカウツギ、マルバウツギ、ノリウツギはユキノシタ科、ハコネウツギ、ニシキウツギ、ツクバネウツギなどはスイカズラ科です。スイカズラ科のツクバネウツギの園芸種で「アベリア」と呼ばれているものです。タイフ

ソツクバネウツギと中国産ユニフロラとの雑種です。花は釣鐘形で淡紅色から白色、萼片は2～5枚で赤くなります。花期が長く夏から秋まで咲き続けます。大正中期に渡来し、街路樹の根締め、公園、庭園によく植えられている半常緑の低木です。

ソツクバネウツギの項P. 40を参照して下さい。



ハナゾノツクバネウツギ(アベリア)

記念庭園の最後は東側出口にあるヨコグラノキです。

34. ヨコグラノキ(クロウメモドキ科、6月、9～10月)

牧野富太郎が高知県の横倉山で見つけたもので「横倉の木」、「横倉」ともいいます。後には東北以南の日本各地、朝鮮、中国中部でも見つかっています。葉の側脈はほぼ平行気味に斜上し、花は地味ですが果実は6～7mmの長楕円形で黄色から橙赤色、熟すと暗赤色になります。県内にも点々と生えていますが、隠岐にはたくさんあって“えいのき”といって、材をくさびや良質の炭の材料に利用されていました。ヨコグラノキの隣にヒマラヤシーダーの大木があります。



ヨコグラノキ

庭園から5号館をぐるっと回って正面に出ましょう。

5号館の自転車小屋の後にも、かつて校舎間に植えてあったいろいろな木が移植されています。それらも見ながら西側に移ると、5号館玄関の反対側、自転車小屋の後ろにネグンドカエデという大木があります。

35. ネグンドカエデ(カエデ科、3～4月、9～10月)

北米東部原産で1882年に渡来しました。寒いところを好む樹で北海道にはたくさん植えられています。平田先生お手植えの木の1つと思われます。奇数羽状の複葉で3～5(稀に7)枚の小葉からなり、トネリコ(マルバアオダモP. 124を参照)の葉に似ているというのでトネリコバノカエデともいいます。カエデの仲間では一風変わった葉です。



ネグンドカエデ

ネグンドカエデは学名の^{アーケル} ^ネ ^{グンド} ^{リンネ} *Acer negundo* L. の

ネグンド

negundo(発見者の人名)からきています。4月葉よりも早く黄緑の花が垂れ下がって咲きます。雌雄異株です。9月頃、雌株にできる果実は2個の種子の開きが広いもののカエデそっくりの実です。補習科の生徒昇降口の正面に大きな木があります。

北門に戻ると、北門を塞ぐようにクロマツの大木が2本並んでいます。

36. クロマツ(マツ科、4～5月、翌年10月)

かつて出雲のあたりは落ち葉の多い照葉樹のシイ、カシ、タブなどの生い茂る土地でした。そこに縄文時代でしょうか弥生時代でしょうか稲作の文化が入ってきて、建築材や燃料としてマツをどんどん植えて切り出していきました。家の近くでは松葉さえ焚き付けとして取り去ったことでしょうか。このようにして運び出していったから栄養の乏しい土地を好むマツにとってはふさわしい環境が維持され続けたのです。しかし、近年、山深くの家までプロパンガスなどが普及し、木の値段は外材などに押されて山は荒れ放題となりマツタケも生えられなくなりました。プロパンガスが手入れの行き届いて風通しのよい松林を好むマツタケを高騰させたとも言われる所以です。山には落ち葉が増え続け、非常に栄養豊富な土壌となり、ライバルに好都合ですから、マツにとっては住みにくくなってしまいました。現在、マツクイムシにやられていると多くの人は考えていますが、マツクイムシがいなくてもマツは滅びようとしていたのです。山は縄文の時代の姿にもどろうとしています。一時、なりを潜めていたマツクイムシが最近猛然と勢いを強めています。圧縮に強く縦の柱にするヒノキやスギに対して、曲げに強い横向きの材、張りに使うマツという日本建築に不可欠な材料はどうなるのでしょうか。海岸あたりに生息し、葉がチクチク痛いクロマツと山全体にあり柔らかい葉のアカマツは幹の色も葉にさわってみた感触でもよくわかります。

クロマツは、黒松とか雄松と呼ばれます。対する雌松はアカマツで、つまり赤松です。クロマツとアカマツの違いを表にしてみました。

種名	クロマツ	アカマツ
分布	海岸部から山地まで	主に山地。尾根筋や岩山など
樹形	円錐形から扇形に、独特の樹形	円錐形から扁平に
樹皮	皮目は荒く深く、黒っぽい	樹皮は薄く皮目も浅く、赤っぽい
葉	太く、長く、堅くて触ると痛い	柔らかく触っても余り痛くない
冬芽	鱗片が灰色で反り返らない	鱗片は赤褐色で反り返る

これはあくまで目安です。と言うのも、両者は自然交配し、雑種が来ています。アイグロマツとかアイアカマツ、アイノコマツ等々、こうなると識別も簡単ではありません。

本校の校舎周辺のマツは、大体クロマツです。校庭側の斜面のマツはアカマツが多いようです。

「松の木は残った」

北門のクロマツは、場所が良くななく幾度も伐採の危機がありました。5号館が建てられる時、北門を広げる時、そして今回の校舎全面改築の時等その都度、出入りに邪魔になると言うので、切られる運命にありました。しかし、山の学校を懐かしむOBや学校関係者の説得によって今もここに生き続けています。

かつて師範学校から新制高校の初期までは下の写真のような松林が校地の周囲を囲むように生えていて、登下校の生徒を見守っていたものです。懐かしく想い出す卒業生も多いことでしょう。現在、道路側に並んでいる松林は、当時の松の生き残りかも知りません。



1951年、昭和26年頃の登校路の坂道。男子はマントでした。

平田植物園めぐりの最後は平田植物園のどこにでも生えているネムノキについて触れておきましょう。(特に、校地の周辺部、グラウンドの周囲や崖に多く見られます)

37. ネムノキ(マメ科、6～7月、9～10月)

山野のいたるところに生える落葉の亜高木。夜、対生する小葉が合生して閉じるのでネムリノキ、男女が共に寝ることの意の合歓から「合歓木」など多数の呼び名があります。中国地方の地方名を挙げてみましょう。出雲部、石見東部、広島、山口にかけては、ネムリギ、ネムリ、ネブリ、ネブリギ、ネムージャノキ、ネンブリコ、出雲部、隠岐、鳥取ではカーカ、カーカノキ、カーカー、カカノキ、石見部と山陽一帯では、合歓の変化したコーカン、コーカ、コーカー、コーカノキ、コーカーギ、コーカイ、コーカイギ、コーカイノキ、変わった名前では岡山のウシノコメ、ウシノママ、ウシノソーメン、ウシノチャノキ、山口ではヒグラシノキ、広島県西部のヤマノコブレなどなど所変われば名も変わります。(広戸 惇、中国地方五県言語地図より)

出雲地方で、カアカ茶とかコウカ茶またはハマ茶といってお茶にする草は、葉がネムノキに似ているので、カーカやコーカから名前がついたと思われますが、これは和名をカワラケツメイ(河原決明)(8~10月、9~11月)といいます。決明はハブ茶にするエビスグサの漢名から来たこととされます。また、田んぼや畦などに多く生える雑草のクサネム(8~10月、9~11月)も葉がネムノキに似ていて草だからクサネムと呼ばれますが、カワラケツメイともよく似ていて混同されています。カワラケツメイは茎は中実で毛があり、花が蝶形にならず開いています。一方、クサネムは茎が中空で毛がなく、花は蝶形でしかもさやが種子一個ずつにつき切れ込みがある点で区別できます。

さて、ネムノキにもどって、6月頃、枝先にピンクの花が夕方の薄暮に咲き始めます。次々と咲くので花期は1~2ヶ月と長く楽しめます。ピンクに見えるのは、花弁(極く小さい)ではなく、たくさんの細長い雄しべが淡紅色をしているからです。9月頃、豆果を下垂します。ネムノキは葉の出るのも遅く、冬も長くねむっているのでしょうか。

では最後に、皇后美智子さまが作詞された「ねむの木の子守歌」を紹介しましょう。楽譜は省略しますが、一度は耳にしたことのある旋律でしょう。

ねむの木の子守歌

美智子皇后陛下 作詞
山本正美 作曲

薄紅の花の咲く
ねむの木蔭でふと聞いた
小さなささやきねむの声
ねんねねんねと歌ってた

故里の夜のねむの木は
今日も歌っているでしょうか
あの日の夜のささやきを
ねむの木ねんねの木子守歌

これで平田植物園めぐりは終わりです。昔は入学すると上の広場で応援歌の練習があったり、フォークダンスをしたといいます。いやでも必ず久徴園に足を踏み入れざるを得なかったのです。受験勉強で窮屈になったのか一度も入り込むことなく卒業していく者もかなりいるでしょう。年配の卒業生が学校を訪れては懐かしそうに久徴園に足を向けている姿をよく見かけます。昨今の生徒は卒業してもそのようなノスタルジーは沸かなくなるのではないのでしょうか。出雲高校に関係している者としては憂慮すべきことのように思われます。

今回の新校舎改築に伴う植物の移築に絡んで、寄付をつのり平田植物園の整備が行われました。生物班OB会(会長、13期卒・梅 恒雄氏)や平田植物園整備委員会(会長、14期卒、安田公臣氏)、そして久徴会の皆さんがボランティアで久徴園内を整備され久徴園に入りやすくなりました。HRや総合学習の時間、放課後等を利用して、一度平田植物園に足を踏み入れてみませんか。

この冊子を有効に利用して、久徴園を可愛がっていただけるよう祈っています。